

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21720083

研究課題名（和文）博文館長篇講談の研究-芥川龍之介を中心とする大正期文学の材源として-

研究課題名（英文） Study of HAKUBUNKAN CHOHEN KODAN: As source of the Taisho term literature centering on Ryunosuke Akutagawa

研究代表者

奥野 久美子 (OKUNO KUMIKO)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50378494

研究成果の概要（和文）：菊池寛の作品「岩見重太郎」および「入れ札」を中心に、大正期文学と博文館長篇講談とのかかわりを明らかにした。「岩見重太郎」においては博文館長篇講談が典拠であることを明らかにした。また「入れ札」でも同叢書が利用されていた可能性、および同叢書が川村花菱など大正期の他作家にも利用されていたことを証した。具体的成果は学会での口頭発表2件、論文2本である。

研究成果の概要（英文）：At Kikuchi Kan's works, "Iwami Jutaro" and "Irefuda", relation by the Taisho term literature and HAKUBUNKAN CHOHEN KODAN was clarified. I found that in "Iwami Jutaro", Kikuchi referred to this series, and that in "Irefuda", he probably referred to this series, and another writer in Taisho term, Kawamura Karyo, also referred to this series. Concrete results are two verbal presentations in the societies, and two papers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本近代文学・講談本

1. 研究開始当初の背景

本研究を申請した頃、日本近代のいわゆる純文学と、講談や浪花節などの大衆芸能とのかかわりは、わずかな先行研究と自身が行いつつあった研究を除いては、ほとんど手付かずの状態であった。故・中込重明氏は、「奉教人の死」の出典判明までの経緯を省みて近代文学研究の死角を想う(2000)において、近代文学の研究者が、講談の存在を無視して作品研究を進めていることを、「死角」であ

ると指摘していた。講談が近代文学に与えた影響を調査研究するには、近代文学作品と(講談本)を比較せねばならないが、講談本そのものの研究としては、明治44(1911)年から大正13(1924)年にかけて全196冊を刊行して広く読まれた(立川文庫)シリーズが主に注目されていた。足立巻一氏の著書『立川文庫の英雄たち』(1980)や、畠山兆子氏の論文「立川文庫」基礎研究(2004)などがあり、研究がすすめられていた。

しかし、大正4(1915)年から昭和3(1928)

年にかけて全 125 冊を刊行して人気を得たもう一つの叢書、〈博文館長篇講談〉に関しては、ほとんど言及されることがなかった。吉沢英明氏が「日本古書通信」に掲載した報告「長編講談」の原本を探る(1993.8)において、125 冊のうち 16 冊分の出典調査(初出とされる新聞連載の特定)を行っていたが、それ以外には全く研究がなされておらず、立川文庫に比べて言及される機会も少なかった。近代の純文学への影響にいたっては、後掲の拙著に収められた拙論が出るまでは、調査を試みた者すらいない状況であった。

しかし、本研究の開始前の数年、自身が行っていた研究によって、大正期の作家たちが講談本を執筆の参考書としていたことが具体的に明らかになってきていた。例えば、芥川龍之介や荒畑寒村が参照した講談本について検証した成果については、拙著『芥川作品の方法—紫檀の机から—』(和泉書院 2009)にまとめた。(この著書は、本研究を開始した 2009 年 4 月以降、2009 年 7 月に出版したものであるが、育児休暇により、本研究の実質的な開始を 2009 年 10 月としたため、本研究の成果には入れていない。)博文館長篇講談シリーズが、芥川にも寒村にも利用されていたことがわかってきた。そこで、さらなる影響関係を調査研究して明らかにしたいという思いを持ち、本研究を申請し、研究を開始した。

2. 研究の目的

研究開始当初、これまで自身によって以外にはほとんど研究がなされていない、博文館長篇講談について、一冊ずつの調査をすすめてゆくことをめざした。自身のそれまでの研究から、大正期の作家たちが講談の登場人物を題材に作品を書こうとするとき、手近な参考書の一つとして博文館長篇講談があったのではないかと推測した。本研究は、この推測に基づき、博文館長篇講談の一冊ずつの内容の検証と、その大正期文学への影響関係を調査するものであった。芥川龍之介をはじめとする大正期の作家たちが、高尚な芸術の世界に閉じこもっていたのではなく、講談という大衆芸能をも貪欲に取り込んで自らの作品世界を広げていったことを具体的に明らかにし、芸能を置き去りにした従来の日本近代文学史観に一石を投ずることを目的とした。

3. 研究の方法

研究開始当初は、4 年間の研究期間で〈博文館長篇講談〉の全 125 冊のうち、半分から 3 分の 2、つまり約 60 冊から 80 冊を調査す

ることを目標に、1 年あたり 15 から 20 冊を目標に調査をすすめる予定であった。研究方法としては、博文館長篇講談を古書にて収集あるいは所蔵する図書館(主に東京の 3 館)で閲覧ののち、同じ題材の文学作品への影響がないかどうかを検証、影響関係を指摘できるものが見つければ、続けて同じ題材で先行する講談本との本文比較や、初出調査などの書誌調査を行う、という研究方法で、1 冊ずつ地道に調査研究をすすめてゆく計画を立てていた。

一年目の 2009 年度は、まずは同叢書の地道な収集と現物確認が必要であると考え、本研究採択前に収集していたものも含め、全巻の約 20%にあたる 24 冊を収集した。それらのうち、「石川五右衛門・自来也」に関しては、上司小剣の歴史小説(社会講談という位置づけ)である、「石川五右衛門」(「改造」大正 9 年 7 月～10 月連載)の典拠となっているのではと考えて調査をしたが、典拠と言えるだけの証拠は発見できなかった。同年度はその他に、博文館長篇講談のうち「由井正雪」「紀伊国屋文左衛門・銭屋五兵衛」「柳川庄八」「河内山宗俊」の 4 冊を調査した。

二年目の 2010 年度は、博文館長篇講談の網羅的調査という研究形式から方針を変更し、講談種と思われる大正期の文学作品を選び、その作品と博文館長篇講談その他講談本との関わりを調査研究することとした。小説作品を先に立て、それにかかわる講談本を博文館のものに限らず網羅的に調査する方法のほうが効率的かつ効果的であると考えたため、以後はこの方法で研究をすすめた。2010 年度は具体的には、菊池寛の戯曲「岩見重太郎」と、同じく菊池寛の小説「入れ札」の研究に着手した。「岩見重太郎」については、調査研究の結果、菊池寛が博文館長篇講談を参照したことが明らかとなった。この研究に関しては 2010 年 7 月 31 日の京都教育大学国文学会において口頭発表した(項目 5 の学会発表②)に示した業績)。

以後、2011 年度、2012 年度も、2010 年度と同様の研究方法で菊池寛の「入れ札」などについても研究をすすめて、項目 4 に示す成果を得た。

4. 研究成果

上記のような研究過程を経て、本研究全体の成果としては、芥川龍之介の盟友である菊池寛の作品 2 篇について、具体的に材源を明らかにし、博文館長篇講談の利用についても具体例を示すことができた。博文館長篇講談および講談本が大正期文学に広く影響していたことを実証できた。具体的には以下のとおりである。

(1) 菊池寛「岩見重太郎」と博文館長篇講談のかかわりについて

菊池寛の「岩見重太郎—An Allegory—」(「中央公論」大正11年4月)という戯曲は、発表当時は良くも悪くも菊池寛らしい作品として評価されていた。本作を主な研究対象としてとりあげた論文は管見の限りほとんどなかった。わずかに、構造や展開に関しては、片山宏行「イギリス、アイルランド文学の投影」(『菊池寛の航跡(初期文学精神の展開)』和泉書院 平成9年9月)において、アイルランドの劇作家シングの「聖者の泉」の影響が指摘され、「知らなかった現実の相(下男=重太郎)が明らかになることで、かえって幻滅的な結果がもたらされるという、皮肉で逆説的な展開の点では「聖者の泉」にヒントを得ていると見て良いのではなかろうか。」と述べられていた。

岩見重太郎と言えば、芥川龍之介もエッセイの中で論じている、講談・講談本のヒーロであるが、その岩見重太郎を主人公とする戯曲であるにもかかわらず、本作と講談本とのかかわりに関してはそれまで全く検証されていなかった。

従ってこの研究においては、岩見重太郎に関する、本作以前の明治大正期の講談本を悉皆調査し、登場人物名の比較などから、菊池が「岩見重太郎」執筆にあたり、複数の講談本を参照しつつも、博文館長篇講談を主要な参考書として利用したという結論を得た。芥川龍之介がエッセイ「僻見」で同じく博文館長篇講談の『岩見武勇伝 笹野名槍伝』を利用したことは既に研究済みであったが、同じものを菊池寛も利用していたのである。

菊池は上記の博文館講談本の筋を把握した上で、独自に設定した人物、山崎七郎次の視点を加えることによって、「英雄主義」批判というテーマを打ち出した。重太郎を「神の如く」崇める講談本の筋をほぼそのまま借りながら、七郎次の最後の一言だけで講談本の世界観をひっくり返して見せたのである。大正期の歴史小説、史劇に流行した偶像破壊の手法として、安易といえば安易な方法であろうけれども、このような手法を菊池自身は痛快に感じていた様子もうかがえた。

この研究については、途中報告を後の項目5の〔学会発表〕②に示した口頭発表にて行ったほか、同じく項目5の〔雑誌論文〕②に示した成果により論文として発表した。

(2) 菊池寛の「入れ札」と博文館長篇講談を含む講談本、実記、実録などのかかわりについて

菊池寛の小説「入れ札」(「中央公論」大正10年2月)は、国定忠次とその子分を主人公

とする短編小説である。作者自身が「短篇小説中、歴史小説では「入れ札」は、会心の作である。」(「自序」改造社版『菊池寛全集 第一巻』昭和6年・7月)と述べているほどの自信作であり、それなりに注目されるべき作品であると考えられるが、研究はあまり進んでいなかった。特に、国定忠次がもともと講談のヒーローであったにもかかわらず、「入れ札」を論ずるに際して講談、講談本を視野に入れた研究はなされていなかった。

そこで、本研究において、「入れ札」と講談本とのかかわりの調査を開始した。

ただ、この作品の前提となる、明治大正期の国定忠次ものについては、実録等も数多くあり、講談本だけでは論じきれない広がりがあった。従って、明治大正期の国定忠次もの文芸全般を調査した中での「入れ札」の特異性を探る必要が生じた。膨大な調査点数になることはわかってはいたが、研究上必要であったため、単行本を中心に、百あまりの国定忠次関連文献を管見の限り悉皆調査した。この調査には二年あまりを費やしたが、結果、以下のようなことが明らかになった。

すなわち、「入れ札」以前の忠次もの文献は、子分の名前やストーリー展開から、大別して二つの系統に分けられること。本研究ではこれを〈実記系〉と〈円蔵系〉と名付け分類した。そして「入れ札」の顕著な特徴は、両系統が混合しているということであり、ここに菊池寛の執筆上の戦略がうかがえた。つまり、菊池は〈実記系〉で上位の子分である九郎助(「入れ札」の主人公)のライバルとして、〈円蔵系〉の「総領乾分」浅太郎を配するという絶妙な人物配置をしており、効果を計算したものであると考えられる。

また、九郎助など主要人物の造型についても、従来あった忠次もの文芸を巧みに取り入れつつ、オリジナリティも示す形で成り立っていることがわかった。そして、菊池が参照した講談本は、一つに確定することはできないが、博文館長編講談を参照した可能性も高いということを論証した。

本研究においては、副産物的な扱いではあるが、「入れ札」以外の大正期忠次もの文芸(舞台脚本を含む)に見られる講談本の影響についても考察することができた。中でも博文館長篇講談については、複数の講談本、および戯曲の川村花菱作「国定忠次 三部曲」が、ほぼ引き写しといった状態で博文館長篇講談を取り込んでいることが明らかになった。同叢書の大正期における影響の広がりを、また一つ確認することができた。

以上の成果について、途中報告を後の項目5の〔学会発表〕①に示した口頭発表にて行ったほか、同じく項目5の〔雑誌論文〕①に示した成果により論文として発表した。本研究には、先に記したように文献調査に2年以

上を費やしたため、本研究課題の最終年によりやくまとめあげることができ、近代文学作品と講談本との関係を明らかにするという研究目的の一端を果たすことができたものと考えている。

(3) 明智光秀もの講談について

2012年度は、勤務先大学の公開講座に関連して、公開授業「近代の太閤記物—講談本等の人物像を中心に」上方文化講座（2012年8月30日、於大阪市立大学、項目5の「その他」①の業績）を行った。

この研究と公開授業では、太閤記もの講談と近代文学作品とのかかわりを中心に述べた。研究成果として論文にまとめるには至らなかったものであるが、太閤記には膨大な種類の実録や講談本があり、そのごく一部であるが調査をすすめたところ、実録から近代の講談本、近代の小説、戯曲へという流れについて、一定の具体例をもとに明らかにすることができた。

この公開授業にあたって調査した講談本は、以下のとおりである。

『明智日向守光秀』（揚名舎桃李口演、加藤由太郎速記 日吉堂 明治32・11）

『光秀旅日記』（斯波南叟講演、小林東次郎編 博文館長篇講談第五十五編 大正9・8）
立川文庫第十三編『太閤記巻一 木下藤吉郎』（野華散人著、明治44・10）

立川文庫第二十五編『太閤記巻二 羽柴筑前守』（野華散人著、明治45・3）

博文館長篇講談第一編『木下藤吉郎』（揚名舎桃李口演、大正4・12）

同第十三編『羽柴筑前守』（同口演、大正5・10）

同第二十一編『豊臣秀吉』（同口演、大正6・7）

同第三十六編『太閤』（同口演、大正7・8）

以上（1）～（3）が本研究課題における研究成果である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①奥野久美子「国定忠次講談の諸相—菊池寛「入れ札」など大正期忠次ものを論ずるために—」、「文学史研究」、査読有、第53号 2013、pp. 1-22

②奥野久美子「菊池寛の戯曲「岩見重太郎」—博文館長篇講談とのかかわりについて—

、京都教育大学「国文学会誌」、査読有、第37号、2011、pp.17-28

〔学会発表〕（計2件）

①奥野久美子「国定忠次講談の諸相 —「入れ札」など大正期忠次ものを論ずるために—

平成二十四年度大阪市立大学国語国文学会総会（2012年7月21日、於大阪市立大学）

②奥野久美子「大正期文壇と講談本」

平成二十二年度京都教育大学国文学会（2010年7月31日、於京都教育大学）

〔その他〕

①奥野久美子 公開講義「近代の太閤記物—講談本等の人物像を中心に」

上方文化講座（2012年8月30日、於大阪市立大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥野 久美子 (OKUNO KUMIKO)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50378494